畠山澄子さん(AD06-08)

Q.今取り組んでいることは？

世界一周の船旅のコーディネートを通して国際交流や平和構築に取り組むピースボートというNGOで働いています。業務は幅広いですが、主に二つのプロジェクトを担当しています。

ひとつは広島・長崎の被爆者や核実験の被害者の人たちの声を世界に届けることで核兵器廃絶を目指すプロジェクトです。もうひとつは、戦争や紛争、環境問題、人権問題の現場を訪れながら10代～30代の若者と平和や社会正義のあり方を考える教育プログラムです。ピースボートのスタッフをやりながら、アメリカの大学院で科学技術史の博士課程の学生もやっているので、博士論文も今取り組んでいることの一つです。

【UWC-SEA（シンガポール校）でピースボートの被爆証言会を受け入れてもらった時の様子】

UWC

畠山澄子さん(AD06-08)

Q.UWCの経験が今にどう生きていますか？

UWC在校中に一部の生徒が中心となり、「WAR24：24時間戦時下生活」というイベントを開きました。校内に「チェックポイント」がおかれて身分がチェックされ、定期的に"停電"が起き、戦争体験を持つ生徒の話を聞く会が開かれました。イタリア校には旧ユーゴの紛争を体験した生徒の他、イラクやガザ地区出身の生徒もいたので、フラッシュバックでパニックを起こす生徒が出ました。イラク出身の子は「同じ世界で起きている戦争なのに、みんなあまりにも何も知らなすぎる」と怒りをぶちまけ、ガザ地区の子は「夏休みは検問で過ごして終わった、みんなに私の気持ちはわからない」と言いました。

今でもその時自分が抱えた感情をうまく言葉にできません。ただ、「自分はそういう境遇に"うまれなかったこと"を変えられない」と気付き、だからこそ、"絶対的な安全圏"にいる人間が無知であること、傍観すること、間接的に加担することが、どれだけ人を傷つけ絶望させるかを思い知りました。心がちぎれそうに痛かった。この時感じた痛みが、今も私の芯にあります。

【UWCの卒業式】

私にとって"世界を肌で感じる"とは、
自分で選べるものも選べないものも含めて
世界における自分の立ち位置を知ることでした。

社会人になって10年。たくさんの人が「若いうちは色々な分野での経験を」「社会を変えるためには偉くならないと」「結局はお金」と、自分に言い訳をしながら"グローバル人材"として世界の戦争や紛争、環境破壊、格差社会に加担する仕事に就く姿を見てきました。

UWCでの2年間が私にくれたのは、私に本音をぶつけてくれた同級生らをどんな形でも裏切りたくないという決意です。お金とか地位とか、自分のちっぽけなプライドを満たすために世界の不条理の再生産に加担していいわけがない。それは口で言うほど簡単ではないけれど、それでもそれにコミットすることが、UWC生としての責任だと思っています。